

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：32305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24593327

研究課題名(和文) 乳がんサバイバーのレジリエンスを促進する外来看護援助モデルの開発

研究課題名(英文) Development of outpatient nursing support program to promote the resilience of breast cancer survivors

研究代表者

砂賀 道子 (Sunaga, Michiko)

高崎健康福祉大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：50389748

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：乳がんサバイバーのレジリエンス尺度の作成にあたり、レジリエンスの概念モデル、理論的枠組みを作成し、尺度の下位項目を完成させた。暫定版レジリエンス尺度と既存の尺度(MAC、SF-8)を用いて尺度の信頼性・妥当性の検討を行っている。平成28年3月までに165名より回答を得た。再テストには30名の回答を得ており、本調査計250名を目標に調査を継続している。

また、構成概念を明らかにするために行った「乳がんサバイバーのレジリエンスを促進する要素」の研究が日本がん看護学会誌に掲載されるとともに、同学会の学術奨励賞を受賞した。

研究成果の概要(英文)：To create a scale for measuring resilience in breast cancer survivors, we designed a conceptual model and theoretical framework of resilience, and finalized the sub-categories for this resilience scale. We are investigating the reliability and validity of the scale using a preliminary version of the resilience scale as well as existing scales (MAC and SF-8). Responses were obtained from 165 patients until March 2016 and 30 patients have completed a retest. The survey is ongoing and the study's goal is to investigate a total of 250 patients.

In addition, "Factors that promote resilience in breast cancer survivors," a study that was conducted to elucidate the constructs, was published in the Journal of Japanese Society of Cancer Nursing and received an academic award from this society.

研究分野：がん看護

キーワード：乳がんサバイバー レジリエンス 尺度開発

1. 研究開始当初の背景

世界でがんと共に生きる人(がんサバイバー)は約2800万人、日本においても約530万人に上ると言われている(厚生労働省、2012)。がんに対する医学的進歩は生存率の向上と共にがん体験者を増加させ、サバイバーとして生きる期間を飛躍的に延長させている。がんサバイバーシップは5年生存率や生存期間ではなく、いかにその人らしく生き抜いたかを重視する考え方である(Johnson, 1997)が、日本にもその概念は徐々に浸透し、現在ではがん患者自身が自らのがん体験や思いを積極的に発信するまでになった(近藤、2012)。我が国の体験者にとっても、自分らしく生き抜く方略を見出し、がんと共に生きる生活の質をどのように向上させていくかは大きな問題であり、がん体験者が自分らしく生きられる社会づくりが急務であると考えられる。

乳がんは女性のがん罹患率第1位であり、死亡率とともに年々上昇を続けている。一方で、最新の知見をもとに新たな診断・治療法が次々と開発され、乳がんにも罹患してもその生存率は他のがん比べて高く、長期生存が見込まれるがんでもある。特に乳がん初期治療は多様化し、術前補助療法(化学療法およびホルモン療法)が標準治療になりつつあり、術後も5~10年の補助療法の適応となる患者が多いことから、手術を行った後も外来通院を長期に継続することになる。

乳がんサバイバーは、手術による身体的な喪失だけではなく心理的社会的にも多くの喪失体験を重ねながら、それらの困難を克服し乗り越えていく前向きな力が必要であり、サバイバー自らの力でネガティブな体験をポジティブに転換していくことが、がんとともに生きていくために重要である。

乳がん患者に対する支援においては、多くの心理社会的介入が試みられている。特にグループ療法は早期から取り入れられているが、乳癌診療ガイドライン(2011)ではその短期的な効果は認められても、長期的な効果の十分なエビデンスは得られていない。このことから、長期的な効果を得るためには個人の内的な力を高めていくことが重要であると考えられる。

特に乳がんは5年ではなく10年、それ以上の長期にわたって治療を継続しながら、再発・転移の恐怖と闘わなければならない。治療が外来にシフトされている現在、個人のレジリエンスを高めることは外来における乳がん看護の重要課題である。

初期のレジリエンス研究は心理学、社会学、教育学、精神医学領域などで多く行われてきたが、現在は多様な業務と対人的ストレスに晒される機会の多い医療者、教職者などを対象とした職務レジリエンスの研究が増加している。医学領域では先天性心疾患・小児がんなど病気の子どもとその母親(家族)のレジリエンスの変化を見た研究が多い。

これまでに開発された尺度は、

Wagnild&Young のレジリエンス尺度(1993)、Grotberg の子供用レジリエンス尺度(1995)、Hiew によるレジリエンス測定尺度(2000)などがあり、わが国では中学生や大学生を対象とした学校ストレスおよびストレス反応へのレジリエンス尺度、教師レジリエンス尺度などがあるが、がん患者を対象とした尺度はない。

2. 研究の目的

乳がんサバイバーのレジリエンス尺度を開発し、それを評価指標とした外来看護援助モデルを開発する。

3. 研究の方法

・レジリエンス尺度開発

<第1段階：レジリエンス構成要素の明確化と尺度項目の作成>

1. テーマ：乳がんサバイバーのレジリエンスを促進する要素

2. 調査方法：

対象者：外来通院をしている乳がん手術体験者20名程度

方法：インタビューガイドに基づく半構成的面接法

3. 分析方法：Krippendorff, K の内容分析

乳がん手術体験者のレジリエンス特性を明らかにするため、概念分析から得られた項目を視点として内容分析を行う。

4. 尺度項目収集：概念分析及び質的調査の結果から見出された乳がんサバイバーのレジリエンス特性と、欧米の先行研究である Resilience Development Model、The Adolescent Resilience Model や、小花和(2004)のレジリエンス要因、他の類似した既存尺度を参考に項目候補の収集を行い、尺度原案を作成する。

<第2段階：内容妥当性の検討>

5. 項目の修正・洗練化：がん看護の専門家(がん看護専門看護師(以下 OCNS とする)及びがん看護研究者数名)のスーパーバイズを受け、項目を修正・洗練化する。

6. プレテスト

対象者：25名の乳がん手術体験者。

方法：診療の待ち時間を利用し面接調査する。

評価内容：回答所要時間の確認、質問項目の表現方法、疑問点などについて。

<第3段階：本調査>

7. 修正した評価尺度を用いて本調査

1) 調査対象者は、以下の選定条件を満たす患者で、計300名程度とする。

医師より乳がんであることを告知され、

手術を受けた（術式は問わない）成人期の女性（65歳まで）

術後3か月から5年程度であり、現在、定期的に外来通院をしていること。

初期治療としての術後補助療法（化学療法、放射線療法、内分泌療法）中であつてもよい。また、その種類は問わない。

再発・転移がないこと。

心身の状態が安定しており、質問紙調査への回答に支障のない者。

2)方法：診療の待ち時間を利用しその場で調査する、または郵送法。

8.本調査の結果分析と項目の精選

質問項目の記述統計量、項目間相関について相関係数の算出、削除項目を検討する。

9.再テスト

本調査に承諾していただいた方で、30名程度の方に信頼性の評価（安定性・一貫性）のため、再テスト法を行う。本調査と同一質問紙を用いて2回実施する。2回目については1回目から1週間～1か月以内に自宅で回答していただき、郵送してもらう。

<第4段階：信頼性・妥当性の検討>

統計解析はSPSS for Windows 18.0を用いる。

10.妥当性の検討：

構成概念妥当性：因子分析

併存的妥当性：他の心理尺度との関連性を検討する。

11.信頼性の検討：内的整合性：クロンバックの係数、修正項目と全体相関を算出する。

4.研究成果

乳がんサバイバーのレジリエンス尺度の作成にあたり、レジリエンスの構成要素を明確化するため、乳がんサバイバーのレジリエンスを促進する要素について質的な研究を行った。その結果、【納得した治療選択ができる】、【再発・合併症予防のための対処行動がとれる】、【治癒できると信じる】、【希望や目標をもつ】、【自分らしい生活ができる】、【現状を受け入れ気持ちを切り替える】、【家族や同病者からのサポートが受けられる】、【社会における自己の存在意義を認識し、役割が果たせる】の8つの要素が抽出できた。

また、先行研究として行ったレジリエンスの概念分析からは、がん体験者のレジリエンスの先行因子として【内なる強さ】、【個人を取り巻く環境】、レジリエンスの属性（本質）として【肯定的変容を促進する力】、【対処戦略を獲得する力】、レジリエンスの帰結として【肯定的な適応を得る】、【well-beingを獲得する】、【QOLが向上する】、【エンパワメントが高まる】ということが得られている。さらに、レジリエンスの中範囲理論、

Resilience Development Model、

The Adolescent Resilience Model や、小花和（2004）のレジリエンス要因、他の類似した既存尺度などを参考にレジリエンスの概念モデルおよび理論的枠組みを作成し、尺度の下位項目を完成させた。

次に、がん看護の専門家（がん看護専門看護師、乳がん看護認定看護師、がん看護を専門とする大学教員10名に依頼し、質問項目の内容妥当性を検討し、項目を修正し洗練させた。25名の方にプレテストを施行し、暫定版レジリエンス尺度64項目を作成した。

作成したレジリエンス尺度と、既存の尺度であるMental Adjustment to Cancer Scale（MAC）、The MOS 8-Item Short-Form Health Survey（SF-8）を用いて尺度の信頼性・妥当性の検討を行っている途中である。

平成28年3月までに165名より回答を得ている。再テストには30名の回答を得ており、本調査計250名を目標に調査を継続している。

また、構成概念を明らかにするために行った「乳がんサバイバーのレジリエンスを促進する要素」の研究が日本がん看護学会誌に掲載されるとともに、同学会の平成27年度学術奨励賞を受賞した。

5.主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

1. 砂賀道子、二渡玉江：回復期にある乳がんサバイバーのがんと共に生きるプロセス The Kitakanto Medical Journal Vol.63 No.4、345-355.

2. 砂賀道子、二渡玉江：乳がんサバイバーのレジリエンスを促進する要素 日本がん看護学会誌 vol.28, No.111-20.

〔学会発表〕（計1件）

Michiko Sunaga, Tamae Futawatari：Exploration of resilience-promoting concepts towards the goal of developing a resilience scale for breast cancer survivors 17th International Conference on Cancer Nursing (Hilton.Prague.Hotel, Prague,Czech Republic)平成24年9月

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計0件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

砂賀 道子 (SUNAGA, Michiko)
高崎健康福祉大学保険医療学部看護学
科・准教授
研究者番号：50389748

(2) 研究分担者

二渡 玉江 (FUTAWATARI, Tamae)
群馬大学大学院保健学研究科・教授
研究者番号：00143206

(3) 連携研究者

()

研究者番号：